

2-105-06

八世。字は爾俊。後の真栄里親方。嘉慶十三年に中国船を護送する船の大通事として閩に赴く。嘉慶十五年に中議大夫。嘉慶十七年には紫金大夫。久米村の総理唐栄司を十三年勤めた。『家譜（二）』六九六頁。

(43) 統祈 切にこいねがう。

(44) 毛廷器 乾隆十九〜嘉慶二十一年（一七五四〜一八一六）。久米系毛氏（普久嶺家）六世。兼本里之子親雲上、のちに普久嶺親方。元の名は宣哲だが改名して廷器となる。乾隆四十一年に読書習礼のため福建に赴く。嘉慶三年に存留通事、九年進貢の朝京都通事、十三年接貢の都通事、十七年進貢の正議大夫として中国に渡る。嘉慶五年冊封のとき承応所などの職を勤め、十三年の冊封の際にも仮長史として使節と対応した。嘉慶十二年に正議大夫、十五年申口座に陞り、十六年羽地間切伊佐川地頭、二十年真和志間切与儀地頭となる（『毛氏家譜』）。

国王尚灝の、中国商船の返還のため都通事鄭崇基等に付した

執照（嘉慶十三『一八〇八』、十二、二十一）

琉球国中山王尚（灝）、雇募せる商船を賠償せんが事の為にす。

切かに照らすに、本国二号貢船は嘉慶十一年の秋、貢物を装載し、前みて閩省に赴かんとす。奈んせん洋に在りて風に遭い、台湾外洋に飄到し、礁に衝りて船を壊す。該地方官、船を撥りて官伴・水梢人等を撈救して公所に安頓し、閩省に転送す。業に貴

司、両院に転詳して題を請うを蒙り、館駅に安挿し、優加撫恤して銀両を給発して商船を雇募せしめ、其の員役等を將て本国に駕回せしむ。

此れが為に特に都通事鄭崇基等を遣わし、梢伴を帶領し、本船に坐駕し、閩に入りて送還す。詎ぞ意わざりき、中華外洋に至るに及び、賊船に遇着し、業經に捍戦す。然れども力の禦ぎ難きを見て、風に任せて逃走し、大島に飄泊す。奈んせん風波猛起するに因り、遂に打破せられ、官伴人等は救するに遇い生を得て、該島の船隻に附搭し、回国す。随即に本国の海船を備発し、仍お都通事鄭崇基等を遣わし、海船に坐駕して、梢役共に六十三員名を率領し、閩に赴き賠償せしむ。但だ海上の行船往来は、専ら印信・執照を以て憑と為して通行す。

今、差去せる員役は、文憑無ければ、以て各処の官軍の阻留して便ならざるを致すを恐る。此れが為に王府、札字第一百九十二号の半印勘合の執照一道を給発し、都通事鄭崇基等に付し、収執して前去せしむ。凡そ所の関津及び沿海巡哨の官軍の驗実に遇えば、即便に放行し、留難して阻滯するを得る母からしめよ。須らく執照に至るべき者なり。

計開

在船都通事一員 鄭崇基 人伴四名

在船使者一員 章廷器 人伴四名

管船夥長・直庫二名 鄭邦達 保開基

水梢共に五十一名

右、執照は都通事鄭崇基等に付し、此れを准けしむ

嘉慶十三年（一八〇八）十二月二十一日

注（1）遇 校訂本の頭注では「過」とあるが、類例により「遇」に改めた。

（2）章廷器 嘉慶十三年の在船使者。

（3）鄭邦達 嘉慶十三年の管船火長。嘉慶四年（一七九九）に勤字として福建にいたという記録が『中山世譜』にある。

（4）保開基 嘉慶十三年の進貢船の管船直庫。『宝案』では嘉慶十七年にも管船直庫として名がみえる（卷一一三）。

## 2-105-07

国王尚灝より福建布政使司あて、嘉慶十一年・十二年の中国商船の返還のため派遣した員役を接回するための船を送ることを請うむねの咨（嘉慶十三《一八〇八》、十二、二十一）

琉球国中山王尚（灝）、員役を接回せんが事の為にす。

案照するに、嘉慶十一年、進貢二号船隻、台湾洋面に漂到し、礁に衝<sup>あた</sup>りて撃砕す。大皇帝の海邦を垂憐するを叨蒙し、銀兩を賞賜され、其の員役をして商船を租雇せしめ、以て回国を得るは、深仁厚沢にして加うるに有りて已むこと無きなり。随<sup>つ</sup>いで都通事鄭崇基等を遣わし、其の船を奉還せしむ。

又、嘉慶十二年、接貢船隻、海壇洋面に飄到し、礁に撞<sup>あた</sup>りて撃砕す。又、前例に照依して船を雇いて回国するを蒙る。此れ誠に皇恩の憲徳にして感激すること地無きなり。亦た、経に都通事鄭世俊等を遣わし、其の船を奉還せしむ。各々案に在り。

料<sup>はか</sup>らずも鄭崇基等の駕する所の船隻は、中華外洋に駛到し、賊船に遇着す。力を尽くして捍戦するも、然れども勢いの防ぎ難きを見て風に任せて逃走し、大島に飄到す。奈<sup>いか</sup>んせん風波を被りて損破す。是を以て本国の海船を遣発し以て賠償を行う。

茲に査するに、其の両船の員役等は、理として合に来夏に謝恩の船隻に附搭して回国せしむべし。但だ許多の人数なれば、一船に搭回すること能わず。倘し另に船を撥<sup>おく</sup>りて接回するに非ざれば、勢い必ず過半は閩に留まり、皇上の遠人を厚恤し、早汎にて遣回するの浩慈に副わず。此れが為に特に都通事毛廷器等を遣わし、海船一隻に坐駕し、梢役を率領し、前<sup>す</sup>みて閩省に赴き、各員役を接回せしめんとす。

伏して乞うらくは、貴司、聖主の柔遠の至意に仰休し、<sup>撫</sup> 兩院に転詳し、速やかに内港に吊進し、館駁に安挿するを賜わらんとを。乞うらくは来夏の早汎にて返船の員役を將て来船に派搭し、遣発して帰国せしむれば、安心に航海し、以て逗留の憂いを無くすに庶<sup>あか</sup>からん。此れが為に貴司に備咨す。請<sup>ね</sup>煩<sup>が</sup>わくは查照施行せられよ。須らく咨に至るべき者なり。

右、福建等处承宣布政使司に咨す